

勝川春章筆・「美人習字図」における顔面の 前面性について

小 野 一 郎

指導 東京芸術大学美術学部教授
人体美学研究室

西 田 正 秋

I 抄 録 ・ 目 次

(1) 抄 録

日本の絵画（明治以降を除く）における人物画では、
仏画等の特殊な場合を除いて前面向きの顔面が描かれて
いる作例は極めて少い。その中において春章の作品中に
は前面向きの顔面描写を多々見出すことができるので、
春章筆・「美人習字図」を主体に「婦女十二ヶ月」・「
美人読書図」等から彼の作画態度等の考察を通して、あ
る程度は前面向き顔面も描かれたということ肯定しな
がらも、結果的には西田教授の説かれる「浮世絵におけ
る前面向きの顔面表現は(註1) dead angle・禁忌であ
る」という問題へと論述したものである。

(2) 目 次 略

II 序 説

(1) 緒 言

日本の絵画（明治以降を除く）における人物画の顔面
方向を見ると、礼拝像としての仏画や、絵巻物・浮世絵
中の群像表現等の場合を除いては、普通は概ね顔面の方
向が所謂(註2) 7分：3分の斜前向きの位置で描かれ
るのが定型であって、前面向きの方向で描かれている作
例は極めて少い。その理由としてまず考えられることは
顔面の中央に位する鼻の線表現の困難さによるという
ことであろう。即ち表現方法が油絵技法の如く明暗陰影
等による立体的表現と異り、線描を主としたものであれ
ばその表現は甚だ困難になり、又もし表現されたとして
もそれは7分：3分の斜前向きの顔面に比して著しく美
的効果が劣勢になり、むしろ醜悪に近くなることさえあ
る。

だからこの顔面の前向きは禁忌され、それは dead
angle なのだということ向西田教授が詳述しておられる
のでここでは省略するが、春章がその dead angle を
敢えて犯して特に前面向きの美人を大きく描いていると
いうことは種々の問題を含んでいると思われるので、人
体美学の立場から考察を進めたいと思本 thema を企

図したものである。

(2) 春 章 ・ 略 歴

勝川春章（享保11年～寛政4年）（1726～1792）明和
～寛政に作画した浮世絵師。勝宮川春水の高弟で勝川流
の祖。姓は藤原、俗称祐助。旭朗井・西爾・李林・六々
庵・従画生などと号し、俳名を宜富といった。

(a) 役者絵における個性描写

従来役者絵は鳥居家の独占であったが、その表現は単
に pose と紋章からその役者が誰であるかを知らせ、更
に文字をもってその芸名を記しているように、役者その
ものの顔面及び個性表現等は不十分であった。当時は画
壇の変革期で、京都では円山応挙が写生に新生面を拓い
て世を風靡しようとする時であり、時好に応じて新を競
う浮世絵師達がこの新気運を捉えようとするのはむしろ
当然であったろう。そこで彼は写生描写に先鞭をつけ、
役者の個性描写に成功し、そのひきしまった筆致で立役
や、所作物の舞台における活発な動作を描写すると共に
似顔絵（肖像画風）としての新生面を拓き、世人の嗜好
に投げ好評を博した。

(b) 肉筆画家・春章

藤懸博士は春章を指して「浮世絵界において肉筆と版
画との両方面に一時期を劃せる天才であり、肉筆に於い
てはその巧妙なこと当代の浮世絵師中他に此肩するもの
なし。」と云っておられるのを見ても彼の力量をうかが
い知ることができよう。

III 考 察

(1) 春章筆・肉筆画における顔面の前面性について

図表(T・I)を見てわかるように、「婦女十二ヶ月
図」(一、二月欠)に於て彼は36名の作中人物中4名
(11.1%)もの前面向きの美人を描いているが、それを見
ると堂々と憶することなく、この dead angle に挑ん
でいるかのようである。たとえば「竹林七姝図」(作中
人物7名)、「美人群遊図」(作中人物11名)などの群
像表現においてすら1名も前面向きの顔を描いていない

彼であるから、「美人習字図」において3名の作中人物中に1名の前面向きの美人を特に描かなくても、他の顔面方向に描けば十分描けるはずなのに、敢て前面向きの顔を描いているのは、前述したように彼の卓絶した描写力による自負と、或いは目新しさ、独創性を得ようとする彼の意欲、および肉筆という版画と異った材料などに起因するのではあるまいか。

それで何故肉筆が版画に比較して前面向きが描かれ易いかということについて考察してみる。まず版画は多くの人々に見られる。即ち1枚の原画が複製として批判される頻度数が頗る多い。当時栄えていた鳥居派の役者絵が衰え、写実的な春章の役者絵が売り出されたように、大衆という観賞者層の中で共感を起し得ない作品は自然に淘汰されて行ったのではあるまいか。錦絵の創始者と云われる春信の作品626図中に前面向きの人物は僅か6名であり、しかもその全部が男性であるということは、版画において如何に美人の前面向きが禁忌されたかという1傍証になると思う。

ところが肉筆画はそれ1枚が勝負である。しかも版画や絵本や現在の展覧会のように多くの人々に観賞されるという場と方法を持たなかったと思われる当時においてそれは所蔵者の手に渡ってしまうと世間大衆の目からは遮断される結果になったものと考えられる。そこでもしその作品の出来栄が悪かったとしても、それが批判され、宣伝される率は版画における同様の場合の比ではなかったと考えられよう。だから作家の立場としても印刷され世に問われるという目的を最初からもった版画以上に、肉筆はある意味ではより気楽に、そして意欲的に実験的な仕事もできたのではあるまいか。彼の肉筆画が殆ど晩年の作で、しかも役者絵が極めて稀であり、多く理想化した美人画が描かれたということにも彼の作画態度の一端がうかがえるような気がする。

故に定型的な版画の方ではなく、より自由な肉筆画の方に前面性顔面を見出すのは、このような消息も含まれているのではないかと考えてみたのである。北斎漫画にはその性格と表現上、前面向きの顔が多々描かれているが、彼の肉筆画・「墨堤観桜」には作中人物23名中3名の前面向きの顔が描かれているがこれも肉筆画の故ではあるまいか。

(2) 春章筆・「美人読書図」について

この図は本 thema の「美人習字図」と雙幅であるといわれている。2女性が顔をつき合さんばかりにして読書している図であるが、図の向って左の女性の目を見ると、上脛が下凹の弧状をなして下垂し、完全ではないが写実的に伏目の思持ちで描かれている。又鼻の左鼻翼（向う側のこばな）が僅かではあるがのぞいている。この

ような表現例は浮世絵版画の中では殆ど見ることができない。この伏目と鼻翼の表現は典型的な浮世絵の美女の表現としては実に稀例である。もし当図が肉筆である為に形式化されない写実的な表現方法をとったのだとすれば、彼の肉筆と版画に対する作画態度の明確な相違とも云うものを表示しているとも考えられる。

向って右に描かれている左斜め下向きの典型化された美女の顔面に比較して、向って左の女性の顔面は美的効果が劣るようであるが、彼の力量から推して当然向って右の美女に勝るとも劣らない表現ができたはずなのに、彼の写実性追及意欲が美的効果の劣勢さえも意に介せず敢えてこのような顔面表現を実験させたと考えるのは、彼の創作性を庇護する同情的見方に過ぎるであろうか。

(3) 春章筆・「美人習字図」における前面向きの顔面を他の方向に変えた場合の想定図

本図に描かれている前面向きの女性の代わりに、ほぼその位置に他の定型的な顔面方向をもった女性が描かれたと仮定してみる。この場合色々の顔面方向が仮定できるが、ここでは他の2女性を動かさず、又前面向きの女性の体勢も殆どそのままにして考えると、まず浮世絵に描かれた美人の典型的顔面方向を選択するとして、(1)左斜め前向きと、(2)右斜め前向きの2方向によって描いてみることにし、他の顔面方向（顔面方向に伴わない視線方向の眼をもったものも含めて）の場合は一切省略することにした。

(1) 左斜め前向きの場合

ここでは構図上やや下向きとし、春章筆・「美人読書図」中の向って右の女性の顔面を参考として作図してみた。(Fig・7とする。) Fig・7を原図(Fig・5)に比較してみると、これはこれなりにまとまって見え、決して悪くはないように思われる。即ち典型化された斜め前向きの顔面に変改されたこの図(Fig・7)の方が却って原図(Fig・5)よりすなおな浮世絵としての定型的な美的効果が勝っているとするならば、それは原図(Fig・5)の前面向き女性の表現の無理さ拙劣さ、または浮世絵空間における前面性顔面の異和性に起因するのであろう。敢えて彼が前面向きの女性を描いたという立場に立って考えてみると

① 変改図(Fig・7)のような構図にすると、原図(Fig・5)と雙幅であると云われる「美人読書図」の構図と似て来るのである。雙幅に同様な構図を繰返すということを守るために、この美女に典型的な斜め前向きの顔面方向を与えなかったのではあるまいか。

② 変改図(Fig・7)では女性の水平面に対する両目の視線角度がほぼ等しく、その上3人の視線方向が画

面の中央部に集まって交錯する。すると画面が求心的になって非常にまとまりがよくなるのではあるが、又考えようによっては向って右の女性を原図 (Fig・5) のように前面向きにすることにより、この強い集中性から逃れた解放感・ひろがりも生じて来るという見方も成り立つのではあるまいか。

(2) 右斜め前向きの場合

前述したように今度も体勢を殆ど動かさずに (右肩を少し変えた程度) 向って左前の女性の顔面を参考にして問題の女性を変改作図 (Fig・8 とする) してみた。

Fig・8 を原図 (Fig・5) と比較して3女性相互の関係を見ると、向って左側の前後に重なった2女性と、向って右の変改作図した女性とで画面を縦に折半したようになる。又向って右の女性を本作図 (Fig・8) のように右斜め前向きにしたことにより、3女性間の会話、緊密感と焦点がうすれ、中央部に空洞のようなものができて画面の有機的構成が弱くなり、観賞者への迫力がなくなるように思われる。たとえば向って左の女性2人「ねえ、書きましょうよ」、右の女性「いやだわ」というような反撥した会話のとりかわしも感じられ、ツンとした感じになり到底まとまらず、ものにならないと思う。

以上(1)・(2)を総合して考察を進めると、この場合春章が前面向きの女性を描いたことを肯定する方向が出て来る。即ちこれを逆に考えれば原図 (Fig・5) は、前向きの顔の女性も他の2女性も、まさにそのままその空間に有機的に構成されるべき必然性を確保しているのであるから、やたらな一部の変改は徒らにその有機的空間構成を破壊することにしかならないであろう。そこで向って左の2女性の pose をそのままにしておくとしたら向って右の女性はやはり前向きに描かれなければ画面構成に破綻をきたす結果になるのであろう。だから描かれ得べくして描かれた前面向きの顔面ということになる。この考察はこれだけでは余りにもこの作品 (Fig・5) を肯定した上での論述のようでもあるが、次に顔面の分析をして更に論及してみることにする。

(4) 原図 (Fig・5) における前面向き顔面と右斜め前向き顔面の縦の proportion の比較

図の向って左手前の女性の顔面をそのまま起し、正中線を想定して、向って右の前面向きの顔面と縦の proportion の比較をしてみる。(Fig・9 とする。) 同一図中に描かれたためでもあろうか、両顔面とも前額髪際・頤端間の長さがほぼ等しく、眉・目・鼻底面・口(口裂)も殆ど等しい proportion の位置に描かれている。こうして見ると両女性の顔の長さや、諸器官の位置等の比例は意外に申し合せたように殆ど等しいにも拘らず、一寸見たところでは斜め前向きの女性はまさに浮世絵風の delicate

な美女に見えるのに、前面向きの女性の方が小肥りのすこしぼんやりした、お粋な女性にしか見えないわけは、おそらく前向きの顔面が浮世絵風に洗煉・典型化されていないという主要な理由以外に、(1)顔面の横巾の広さと、(2)鼻の両側の線の拙劣さに起因するかと思われる。

① 顔面の横巾の広さについて

原図 (Fig・5) の前面向きの女性の顔面を斜め前向きの顔が前面向きになった時を想定して、顔の横巾を削り、鼻の描法をかえて作図してみる。(Fig・10 とする) Fig・10 を見ると典型的な所謂7分:3分の美女と比較すればその美的効果は劣勢ではあるが、原図 (Fig・5) の前面向き女性と比較した場合には聊かましになったとはいえると思う。ということは原図 (Fig・5) の前面向きは顔面の横巾の広さがその美的効果を大いに減じているということになる。

② 鼻の両側の線について (西田教授説)

一般に日本人の鼻は鼻梁から斜側面へ移行する稜がはっきりしない。即ち西洋人の鼻と比較して立体感に乏しいのもこのためである。それでは原図 (Fig・5) の前面向き女性の鼻の両側の縦の2本の線は鼻のどの部分を描いたのであろうか。Fig・11は西洋人の鼻を所謂『面張り』で模型的に作図したものである。この場合鼻の両側の線は鼻の前面と側面との稜線なのである。

Fig・12は原図 (Fig・5) の前面向きの女性の鼻を模型図的に図示したものである。この場合の鼻の両側の線は鼻と頬との接触部位を線的に表現したものである。それ故にブヨブヨした膨れたような不恰好な鼻になるのである。それはその表現の根底に立体観より来る稜の表現性をもたず、境界線的・輪廓線性格のみを有するのは、日本人の鼻の構造による外的条件と、民族性としての平面観という内的条件との問題に起因すると思われる。

尚原図 (Fig・5) の右斜め前向き顔面に、「美人読書図」の左斜め前向き顔面を裏返しにして重ね合せて見ると、頬の輪廓線から眉・両目・鼻・口等殆ど一致する。それは彼の研鑽・熟練と形式化の洗煉度とが、手勝手の優劣を超越して、さすがに春章描くところの美女の典型としての堅実な proportion を確立させているということであろう。それほど手堅い手腕を有する春章でも、前面性の縦の、proportion は正確であるのに、横巾の proportion と鼻の縦線とは master しきれなかったのではあるまいかと私は考えるのである。

(5) 原図 (Fig・5) における前面向き顔面の deformation

この顔面を通る正中線を想定し、この顔面を裏返しにして正中線を一致させ重ね合せてみると、正中線に対し鼻がやや右に寄り、両目の正中線に対する傾斜度が左右

それぞれ異り、頬から顎端へかけての輪廓線がずれるということなどは、この pose が上体右側屈であり、従って顔面も向って左へ傾斜しているために生じる構図による微妙な deformation だと思われる。この側屈などによる顔面の deformation の問題は幾多の作例により尚展開される多くの問題を含んでいるが、本項ではふれず後日の課題にしておく。

(6) 前面向き顔面の禁忌

以上原図 (Fig・5) における彼の前面向き顔面を、作者の独創性・写実性・画面の有機構成等の立場から一応は肯定した上で考察を進めて来たのではあるが、彼の描く他の顔面の左斜め前向き・右斜め前向き等と比較して、明かにこの前面向きはその美的効果の上において劣ることを認めざるを得ないのである。また口辺の表情にしても斜側面像の微妙な、nuance に比して前面像ははるかに及ばないと思われる。(原図に比してより美的効果をあげるために作図した Fig・10においても尚然りである。) 彼の場合のように作者の創作欲、実験的試み等の態度は高く評価されるとしても、所詮前面性の顔は線的に美的に表現することの困難さと、その困難性のためにその向きを回避して取上げなかった非洗練性による欠点とを、ここに如実に露呈しているのである。故に線描を主体とした日本画の表現においては、顔面の前面向きは礼拝像としての仏画等の場合を除き典型化されることなく、西田教授の云われる dead angle として禁忌されざるを得なかったのであろう。

T・2をみてもわかるように歌麿の作例152図・作中人物348名中に前面向きは僅かに2名(0.57%)で、それも禿と幼童でありその絵における主要人物ではない。左右斜前向きが計323名(92.81%)であるということも前述したように浮世絵における美女の顔面方向の定型化がうかがわれよう。卓抜な描写力を示した写楽の現在判明している全作品といわれている159図中にも写楽作と推定される「役者おもちゃ絵」の群像中にやっと1名前前面向きを見出すにすぎないのである。

(註1)

dead angle—死角。本来は機械工学上での術語であるが、それを西田教授が人体美学上での用語に転用しておられるので、人体美学上での意味は「物象の形態が観者に対して『印象しにくく、かつ表現もしにくくなって』著しく美的効果が減殺されるような角度」のことを云うのである。

(註2)

7分：3分の斜前向き、この場合は顔面を真正面(即ち前面)から見ると顔面自体の右半分と左半分とが各50

%ずつ見える、即ち5分：5分であるのが、顔面を斜め向きにすると左右の%に差を生じて来る。その%が70%：30%位になる位置を、西田教授が人体美学の用語として「7分3分の斜め向き」と称しておられるのである。この7分3分は顔面36°位前面向きの正中線から左右いずれかの方向にふれた場合である。

VI 参考文献

- | | |
|-------|-----------|
| 西田 正秋 | 美術解剖学論改 |
| 西田 正秋 | 顔の形態美 |
| 審美 書院 | 浮世絵派画集(2) |
| 平凡 社 | 世界大百科事典5 |
| 〃 | 〃 27 |
| 〃 | 大人名事典2 |
| 藤懸 静也 | 木版浮世絵大家画集 |
| 吉田 暎二 | 春信全集 |
| 〃 | 写楽 |
| 檜崎 宗重 | 北斎と広重 |
| | 国華 530号 |
| | 〃 531号 |



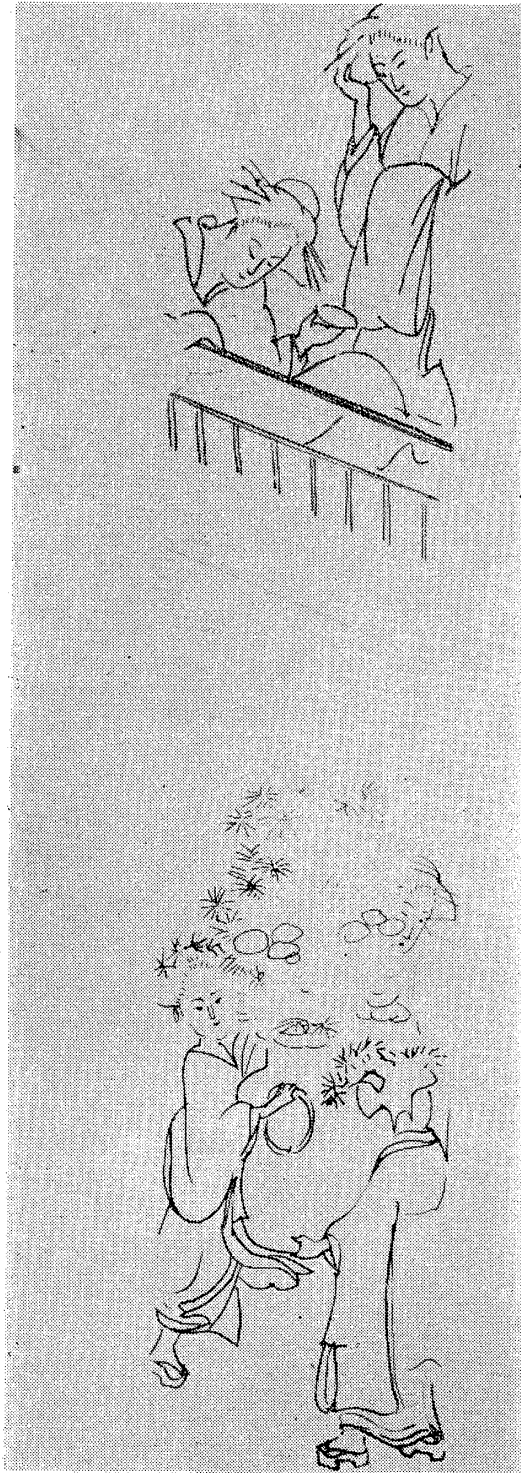
Fig. 1 春章筆・「婦女十二ヶ月図」(五月部分)

白描、小野作図



Fig. 2 春章筆・「婦女十二ヶ月図」(八月部分)

白描 小野作図



Fig・3 春章筆・「婦女十二ヶ月図」(九月部分)

白描 小野作図



Fig. 4 春章筆・「婦女十二ヶ月図」(十二月部分)

白描 小野作図



Fig. 5 春章筆・「美人習字図」、白描 小野作図



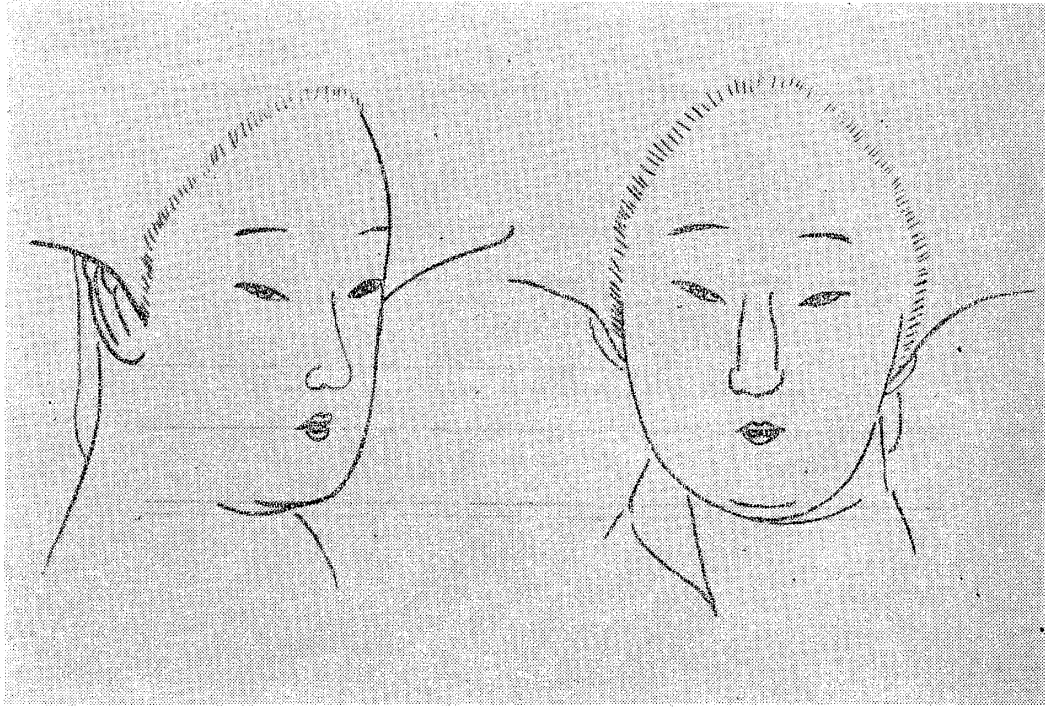
Fig・6 春章筆・「美人読書図」 白描 小野作図



Fig・7 春章筆・「美人習字図」変改図
(前向き顔面を左斜め前向きに変えた場合 小野原図)



Fig・8 春章筆・「美人習字図」変改図
(前面向き顔面を右斜め前向きに変えた場合 小野原図)



Fig・9 Fig・5 の前面向き顔面と右斜め前向き
顔面との縦のproportionの比較



Fig・10 春章筆・「美人習字図」 変改図
(前面向き顔面の横幅と鼻の描法を変えた場合 小野原図)

Fig. 11 鼻の両側の線について 1 (小野作図)

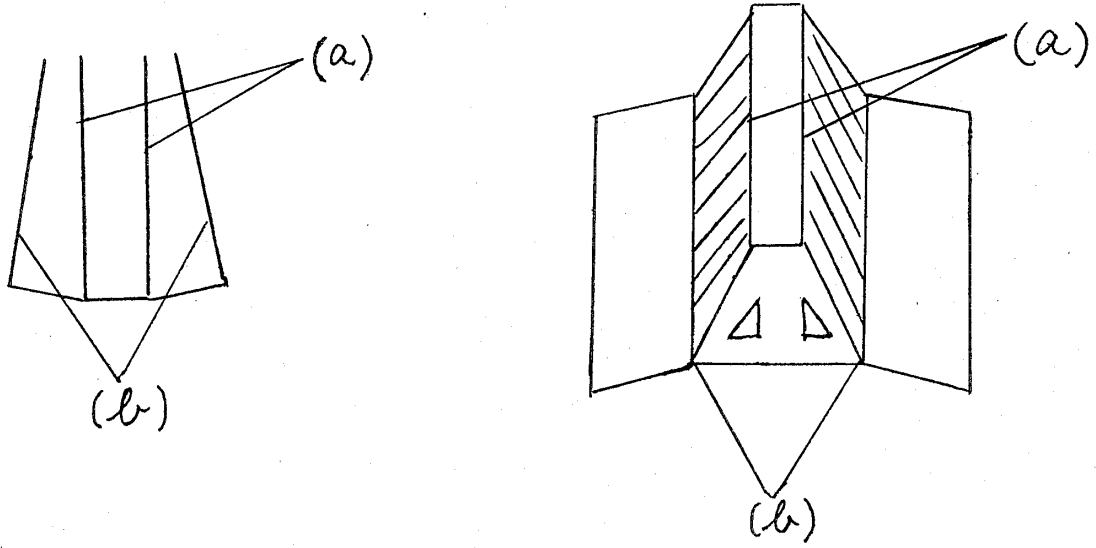
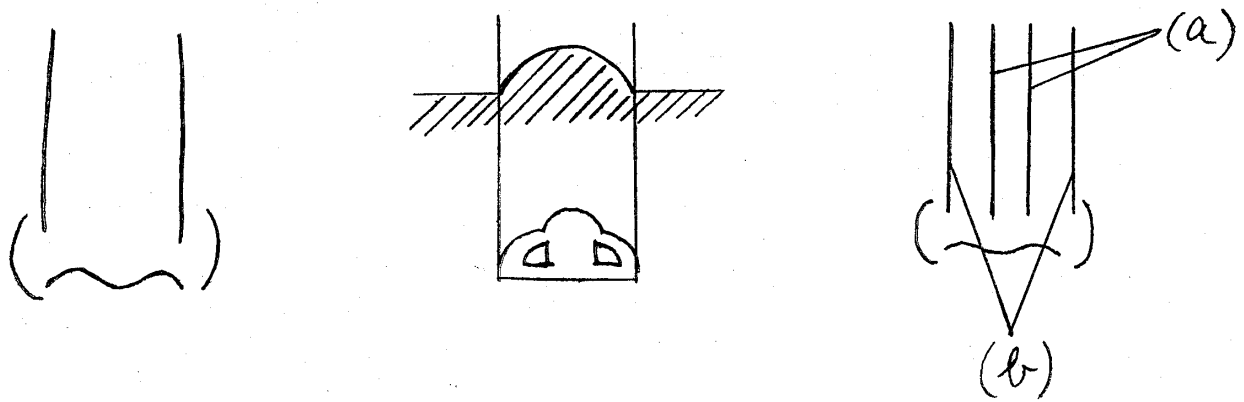


Fig. 12 鼻の両側の線について 2 (小野作図)



T.1 春章筆・「婦女十二ヶ月図」(一、二月欠)における顔面方向の分類

月	作中 人物数	左斜前	右斜前	前 向	上 向	左 横	右 横	左斜後	右斜後	後 向
3	5	3	/	/	/	/	/	/	2	/
4	2	/	1	/	/	/	/	1	/	/
5	3	1	1	1	/	/	/	/	/	/
6	3	1	1	/	1	/	/	/	/	/
7	3	1	2	/	/	/	/	/	/	/
8	3	/	/	1	/	/	/	1	1	/
9	5	1	2	1	/	/	/	/	1	/
10	4	1	1	/	/	/	/	1	1	/
11	5	/	2	/	/	1	1	1	/	/
12	3	/	2	1	/	/	/	/	/	/
計	36	8	12	4	1	1	1	4	5	0
%	100	22.2	33.3	11.1	2.8	2.8	2.8	11.1	13.9	0

T.2 歌麿筆・版画における顔面方向の分類(作例152図)

	作中 人物	左斜前	右斜前	前 向	上 向	下 向	右 横	左斜後	右斜後	後 向
数	348	192	131	2	3	4	3	7	4	2
%	100	55.17	37.64	0.57	0.86	1.14	0.86	2.01	1.14	0.57
単 像	72	40	26	/	/	2	/	4	/	/
群 像	276	152	105	2	2	2	3	3	4	2